

米国の優位は終わったのか？

by Ted Snider

Anitwar .com 2024 年 09 月 03 日

[Has US Supremacy Ended? - Antiwar.com](#)

アメリカは世界の変化の匂いを嗅ぎ取った。ウィリアム・バーンズ CIA 長官は、「アメリカは、もはや地政学的なブロックで唯一の大きな子供ではない。そして、我々の地位は保証されていない」ことを認めた。しかし、アメリカはドグマにとらわれて古いパラダイムが過ぎ去ったことが見えないため、その変化を理解することができない。アメリカは地政学的な潮流の外に漂い出てしまったのだ。

ロシア、中国、インドは、多極化は遠い将来の目標ではなく、現在の現実であると主張している。「世界の多極化の流れは避けられない。それは強まるだけだ。このことを理解せず、この流れに従わない者は敗北するだろう」とブーチンは述べている。ロシアのセルゲイ・ラブロフ外相は多極化を「**事実であり、地政学的な現実**」と呼んだ。「インドのジャイシャンカル外相も同意して「いまや変化は不可逆的になった」とのべている。

しかし、この変化に適応できないアメリカは、一極集中にしがみつき、二極集中を阻止しようと必死になっている。自国の覇権を受け入れる国を一方のブロックと見なし、多極化する世界の中で二者択一を拒む非同盟諸国をもう一方のブロックと見なしているのだ。米国は二極世界も過ぎ去りつつあることがわからず、多極的な現実を二極世界のもう一方のブロックと勘違いしているのだ。

この思い違いによって、米国は国際秩序が必然的にむかえている新しい現実に適応することができなくなっている。現実と一致していないことが、アメリカの外交政策を挫折させてきたのだ。

時代遅れのアメリカン・モデルでは、世界最大の国であり、成長中の大国であるインドは、どちらの側につくかでどちらのブロックが優勢になるかが決まる重石である。長い間アメリカのパートナーであり、ロシアの重要な友人であったインドは、アメリカが考える世界の両方のブロックに足を踏み入れている。インドをアメリカの陣営に完全に引き入れることは、アメリカの外交政策の鍵である。

しかし、台頭しつつある多極化世界の国々は、新しい世界をどちらかを選ばなければならない世界だとは考えていない。米国は引き継ぎ贈り物で国々を口説き、制裁で脅して、排他的な協力関係に誘いこもうとしている。時代遅れのアメリカの世界観のために、必死で誘惑することしかできないのだが、各国はこのような排他的な関係は許さない世界観をもっている。

非同盟諸国がとっている立場は、一方が米国、もう一方がロシアと中国という選択ではなく、一方との関係しか許さない米国の一極世界観と、各国が従う覇権国の利益ではなく、自国の利益を追求するために複数の関係を追求することを認める中立的なロシアと中国の世界観の間に立っているのである。非同盟諸国は、米国よりもロシアや中国を選んだのではない。米国の世界観よりもロシア・中国の世界観を選んだのだ。

ロシアと中国は一貫して、イデオロギーと軍事ブロックという冷戦時代の考え方を乗り越えようとしており、両国の関係は「第三国を敵視するものではない」と主張してきた。

サウジアラビアのアル・サウド外相この考えに同意し、「我々は、あるパートナーと別のパートナーとの間で二極化したり、選択したりすることは考えていない」とのべ、「自国の利益に基づいて」行動し、「(多くの)国々との戦略的パートナーシップ」を持つ権利を主張している。

インドのジャイシャンカル外相は自著「インド方式」の中で、新たな多極化世界とは、各国が自国の "利己的利益" のために、"最適な結果を得るために、同時に争う当事者に対処する "世界であると説明し、新たな世界観を説明している。

インドからアフリカ、中東、ラテンアメリカに至るまで、新たな多極化の鍵は、覇権国の利益に奉仕する新植民地主義的な必要性に代わって、各国が自国の利益を追求する自由を手に入れたことにある。そして、その新しい現実の特徴は、固定化された壮大なイデオロギー同盟に代わって、特定の利益に基づいた特定のパートナーシップを動かしていることである。

ジャイシャンカル氏は、新しい多極化した世界では、各国は「広範なアプローチではなく、より狭い問題で結合している」と説明する。「各国は、しばしば異なる方向に引っ張られる可能性のある問題に基づいた関係を築かなければならなくなる」。彼は、「多くの国と集合するが、どの国とも一致はしない」と言う。また「緩やかで実際的な協力の取り決め」に言及し、新しい現実を「薄明の世界」とよび、そこでは「課題に合わせた柔軟な取り決め」によって「限られた課題に部分的な合意」をえるのだという。

ジャイシャンカル氏は、新たな多極化世界において最も価値ある外交スキルとは、「争っている両当事者に同時に対処して最適な結果を得ること」だと指摘する。だから、「インドは復活したクアッド協定（米日印豪の協力枠組み）を推進する一方で、上海協力機構のメンバーにもなった」。つまり、「ロシアと中国との長年の3極体制が、アメリカと日本を含む1極体制と共存している」ということだ。このパターンは、アメリカの一極か二極かという世界観では通用しない。しかし、インドの行動を、新しい多極化した世界が許容する「自国の利益という観点から見れば」、「より明確なパターンとして浮かび上がってくる」。

多極化した世界とは、米国とロシアのどちらかを選ぶのではなく、収斂するさまざまな問題において、異なるパートナーを選ぶことを意味する。ジャイシャンカル氏は、「インドとアメリカの関係は.....近年花開いた」としながらも、「ロシアは、地政学的な収束が重要な考慮事項である特権的なパートナーであり続けている」と言う。米国との関係が改善する中、インドのナレンド

ラ・モディ首相は同時に、「ロシアとインドの関係は著しく改善した」と述べている。彼は友好関係を「非常に重要」と呼んだ。ジャイシャンカル氏は、インドとロシアの関係を「現代における世界の主要な関係の中で最も安定したもののひとつ」と呼んでいる。

多極化した世界において、イデオロギー的な同盟関係ではなく、特定の課題に基づいた関係を築くことは、（価値観の）異なる国と逆説的な関係を持つだけでなく、同じ国とも逆説的な関係を持つことを意味する。インドは地域的な問題で中国と対立しているが、中国に対するアメリカの世界的な懸念を十分持っているわけではなく、「**中国に反対していない**」。インドはその巨大な隣国について独自の懸念を抱いているが、アメリカのブロックと一緒に中国を封じ込めようとはしていない。ジャイシャンカルは、インドと中国が「単なる国益を超えたところに目を向ければ、両国はよりバランスの取れた世界を作ろうとする努力において実に一致している」と言う。アメリカ主導のQUADのメンバーである一方、インドは中国とともにBRICSとSCOのメンバーでもある。ジャイシャンカル氏は、「インドと中国は、互いに問題を抱えながらも、心の奥底では、自分たちが確立された西側の秩序に異議を唱えているのだという思いを持っている」と言う。そして、「インドと中国は、違いを紛争に発展させてはならない」と主張する。

多極化とは、インドが中国との間で「重要な懸念事項に関して毅然とした態度を取ることができ、しかも中国と安定した関係を築くことができる」ことを意味する、とジャイシャンカル氏は言う。アメリカの世界観からすれば、このことは「簡単には理解できない」。

インドはアメリカが主導するQUADに積極的に参加しており、その目的は中国を封じ込め、萎縮させることにある。しかし、インドは地域的には中国と個人的な問題を抱えているが、QUADが世界的に中国に対抗しようとするときにはそれを抑制している。

米国がインドを味方に引き入れることで一極集中の世界を維持しようとしているのに対し、インドはもはやどちらかを選ぶことに関心がない。インドはもはや超大国の覇権主義的な願望を支持する必要性を感じていない。新しい多極化した世界では、イデオロギー的な同盟関係ではなく、特定の状況における

自己利益に基づいて、できるだけ多くの極とパートナーシップを結ぶ権利を主張している。

アメリカの外交政策が足踏み状態なのは、それがもはや国際秩序の現実に合致していないからである。新しい国際秩序は、多極化が必然的な流れであるという認識の上に機能している。つまり、一極的な世界を支持したり、二極的な世界の中でどちらか一方を選んだりしないことである。それは、できるだけ多くの極と、特定の問題についての結びつきを築くことを意味する。それは、非同盟の世界において特定の問題で協調することを意味する。古いパラダイムから抜け出せずにいるアメリカは、多極化を選択するすべての国々を、二極化した世界における対立極とみなしている。このような世界の読み違えは、米国がもはや通用しない方法で、それらの国々を相手にする原因となっている。(了)

テッド・スナイダーは、Antiwar.com とリバタリアン研究所で、米国の外交政策と歴史に関するコラムを連載している。また、Responsible Statecraft や The American Conservative などにも頻繁に寄稿している。